

図書館報

— Seinan Toshokan pou —

2024.
April
No.196



新入生にイチ押しの1冊

- 1 制作の周辺(3) —ふくだみらん—
図書館長 黒木 重雄

ブックレビュー

『点子ちゃんとアントン(Pünktchen und Anton)』
教務部長 人間科学部 児童教育学科 教授 門田 理世
『理科系の読書術—インプットからアウトプットまでの28のヒント』
図書情報課長 高野 晋治
『リカバリー・カバヒコ』
経済学部 経済学科 3年 中村 百杏
『夜空に泳ぐチョコレートグラミー』
外国語学部 外国語学科 3年 宗 日和子

3-4 世界の図書館

パドバ大学経済学部と地理学部の図書館
経済学部 教授 山村 英司
キャスリーン・サイム図書館・地域センター
法学部 教授 小寺 智史

5-6 図書館イチ押しのコーナー

図書情報課 篠崎 結衣

7 蔵書ギャラリー no.36

『水に浸けられた浸礼派』
(Daniel Featley, *The Dippers dipt.*
or *The Anabaptists Duck'd and*
Plung'd over Head and Eares, at a
Disputation in Southwark, London, 1645.)
学院史資料センター アーキビスト
宮川 由衣

制作の周辺(3)

—ふくだみらん—

図書館長 黒木 重雄



『リングとオレンジ』 福田美蘭 2000年 布にデジタグラフ印刷、油性マジック 額 94.3cm×113.3cm 群馬県立近代美術館蔵

あろうことか、近代絵画の父と称されるポール・セザンヌの作品に油性マーカーで添削を入れた輩がいる。曰く「セザンヌは今日、きわめて知名度の高い画家となった一方で、作品の白の余白、デッサンのくらい、タッチの単純さ、あいまいな空間など理解する困難さがある、と言うことを作品化している。美大受験のための予備校での実技の通信教育で行われる添削のように、私がセザンヌの原寸の複製画に、マジックで丁寧に直しを入れて、額装した作品。」※1

だ、だそうだな、なんたる不遜。この解説を読むだけでも口から心臓が飛び出てしまいそう。案の定、恐る恐る作品に目をやると、あられない言葉が並んでいる。受験生でも凹むであろう添削文を、画面左上から順に並べてみると…
“楕円の形の歪みが目立ちます 形を正確に。”
“この空間が分からない。”
“中心軸がズレています。”
“リングかオレンジが分かりません。”
“不安定なモチーフの組み方です。”
“作品全体を描くと同時に目を引くポイントをつくって良いです。”
“台の設定が不安定です。”
“布は描くポイントをおさえることでより質感がとらえやすいです。”
“布の入り方が画面に動きを与えていますか質感がいま一つです。”
“総評：視点がバラバラです。”

そして、極めつけは画面右下。パリ・オルセー美術館蔵の名作に下されたのは…な、なんと “評価 B+”

アイデアも知識もユーモアも度胸も全て一級品。おまけに絶妙なオチまで用意されている。古今東西どこをどう探してもこんな作品見たことがない。おそらく一時間で描いた(?)であろう本作で、絵画の良し悪しが世間で言う絵の上手下手とは一致しないことを明瞭に示し、さらには、既成の価値への疑いや受験絵画の歪みまでをも告発した。作者の名は、福田美蘭。現代日本を代表するアー

ティスト。1963年2月生まれ。20代で頭角を現し、その後一気に日本のアートシーンを席巻し、トップランナーとして走り続けて今日に至る。

2023年秋、名古屋市美術館で『福田美蘭 美術って、なに?』が開かれた。新作を含む56点が展示された。『リングとオレンジ』は無かったが、いずれ劣らぬパンチの効いた作品がズラリと並んだ。まずはそれらに底通する福田美蘭の描写力について触れよう。一言で表せば“卓越した技術売り物にはせず単なる道具として扱う贅沢さ”とも言えようか。その力をもって主観的な世界を探れば魅力的な作品がわんさか描けそうだが、そこには一切興味を示さず、事象を客観的に描くだけ。例えば、印刷物や写真をそっくりそのままに再現したり、はたまたエドゥアール・マネや安井曾太郎の筆遣いをコピーしたりと、まさしく自由自在。おそらく描くという物理的行為に関しては産みの苦しみなど無縁だろう。もったいない話だが、当然ながら見どころはそこではない。見どころはテーマとアイデアだ。大昔の紅白芙蓉園から現代のゼレンスキーまで、料理される食材はバラエティにぶっ込む。それぞれに風刺のスパイスを効かせたり頓智のソースを絡めたりして、いとも軽やかに一皿“自分が生きている時代”に仕上げてみせる。しかも、全てが(いわゆる美術の)想定外。「いったい私たちが今まで美術とってきたものは何?」と、多くの素人鑑賞者が揺さぶられるに違いない。一応、玄人の私は、予備知識もあり既視の作品もある、にもかかわらず揺さぶられた。なかでもブルブルッときたのは潔さ。作品ごとに仕掛けが変わる。普通の絵描きは一つの仕掛けを後生大事に繰り返し、「またこれ!?’と人々に置き去りにされてしまったりするが、福田美蘭は繰り返さない。自身の“こんな絵を見てみたい”という欲求が満たされたら人々を置き去りにしてさっさと次に行ってしまう。観衆に阿らず自分のためだけに絵を描く。ネット※2のインタビューでは「私にとって美術は基本的に自分がよりよく生きる方法として主体的に選択したもの」と言い切った。こんなにカッコイイ芸術家は滅多にいない。

実は、1962年12月生まれの私は、彼女と同学年。25歳の時には、とあるコンクールの授賞式で一緒に登壇したこともある。その時は同じスタートラインに立ったような気になっていたが、今にして思えば私が周回遅れでたまたま横に並んだだけ。それから35年、たいした接点は無かったものの、ピッタリ同じ時代を生きている彼女には、強い親近感を持っている。彼女が、この世の中で何を感じ、何を絵に切り取るのかに興味は尽きない。この先も福田美蘭から繰り出される作品は、きっと予想を超えた展開をするに違いない。何度周回遅れにされようと、私はそれを見るのが楽しみだ。

※1 福田美蘭展図録より 発行：東京都美術館 発行年：2013年

※2 TOKYO ART BEAT 福田美蘭インタビュー。「近代美術の父」マネから照射するゼレンスキー・日展・現代美術 公開日：2022年10月24日



新入生にイチ押しの1冊



『点子ちゃんとアントン』 (Pünktchen und Anton)

エーリッヒ・ケストナー(Erich Kästner)著 高橋健二訳
岩波書店 1962年 (6階G:電動集密 909/08/31-3)
教務部長 人間科学部 児童教育学科 教授
門田 理世



私は昔から児童文学が大好きで、小学生の頃は図書館で片っ端から読み漁っていました。なかでも私のお気に入り、エーリッヒ・ケストナー(Erich Kästner)とロアルド・ダール(Roald Dahl)で、それは今も変わっていません。彼らの作品はどれも社会の歪みを子どもの視点から捉えていて、それが小気味よく的を射ています。

今回紹介する『点子ちゃんとアントン』は、ドイツが大恐慌下でナチス政権に移行しようとする1931年に書かれたこともあって、ケストナーは点子ちゃんを通して、人が自由であり、社会が公正であることは何かを問いかけてきます。貧困・母子家庭・差別・犯罪・児童労働など、大人の身勝手さの中で生きざるを得ない子ども達のおかれた境遇は、まるで現代の写し鏡のようです。未来を創っていく子ども達に希望を託し、願いを込めて子ども達に語りかける(少々説教臭くはありますが)ケストナーの危機感が読み取れる一冊だと思います。

学生時代、履修していたドイツ語中級の最終課題としてこの本の原著を手に取り、辞書を引きながら読み切ったことも今となつては懐かしい思い出です。そして、乳幼児教育を研究する身となった今では、子どもを一人の人として見つめることの大切さに改めて感じ入っています。

私だけに語り掛けてくれる書物との出会いは、私にとっては孤独からの解放を意味します。皆さんも一生を通して付き合える友人に図書館で出会えますように。

『リカバリー・カバヒコ』

青山美智子著 光文社 2023年
(1階E,F:ブックツリー内外(ベストセラーズ) 913/6A58/10)
経済学部 経済学科 3年
中村 百合



自分の治したい部分と同じ部分を触るとリカバリー(回復)するという都市伝説がある公園の遊具『カバヒコ』。

もしあなたがカバヒコに出会えたら、どこをリカバリーしてもらいますか。今あなたが頭に浮かべた治してもらいたいところは、あなたの弱い部分でもあり、誰よりも真剣に向き合っている部分だと思っています。

皆にとっては些細なことでも自分にとっては心を痛めること。だからこそ人に頼ることもそんな自分を受けとめることも難しい。

この本は、そんな悩みを抱えた人たちとみんなの弱さを受けとめてリカバリーしてくれる カバヒコとの物語を詰め込んだ、いわば心の処方箋です。登場人物の年齢も性別も悩みもそれぞれ違うからこそ、読者はそれぞれ共感する部分を見つけて自分の悩みと重ね合わせることができるのです。

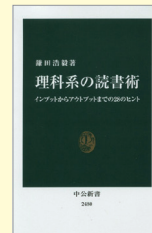
カバヒコは動くことも喋ることもないけれど、自分自身と向き合い悩みの本質を見つけるきっかけとなってくれるでしょう。

不安な朝、落ち込んだ夜、この本を開いてみてください。

登場人物たちがカバヒコにリカバリーされていくように、読み終えたあと、きっとあなたもリカバリーされているはずです。

『理科系の読書術——インプットからアウトプットまでの28のヒント』

鎌田浩毅著 中央公論新社 2018年
(3階G:電動集密 096/019/3)
図書情報課長
高野 晋治



大学には様々な施設がありますが、図書館の規模の大きさに驚かれる方も多いのではないのでしょうか。本学の図書館には約123万冊の本が所蔵されており、読書が好きな方にはたまらない空間ではないかと思います。しかし、普段あまり本を読まない方には、どのような本を手にとつていいのか、また、手にとつた本をどのように読み進めるか、など、迷うばかりになってしまいかもしれません。

本書は、そのような読書に苦手意識がある方へおすすめの一冊です。なかなか教わることのない「本の読み方」について触れることができ、本への向き合い方から、本を読み進める方法、読書をどのように効率よく仕事や学修のアウトプットに繋げていくか、などを解説しています。その中で、読書をするということは、必ずしもその本を読破することが目的ではない点や、本の種類によって読み方が異なる点など、読書のハードルを下げてくれるヒントが記されています。

ちなみに、本書の「理科系の…」というタイトルですが、「理科系」の筆者が考えた読書のノウハウという意味であり、文系の方でも問題なく利用できる内容です。

より豊かな学生生活のために、読書が好きな方は勿論のこと、読書が苦手という方も、本書をきっかけに知の宝庫である図書館をぜひ活用してください。

『夜空に泳ぐチョコレートグラミー』

町田そのこ著 新潮社 2021年
(1階E,F:ブックツリー内外(ベストセラーズ) 095/913/74)
外国語学部 外国語学科 3年
宗 日和子



何でもかんでもモノを取っておくのは、ネグレクトと同じだという人がいる。無視するくらいなら捨てて、無かったことにしなさい、と。

使わないモノを取っておくって、そんなにまずいことなのか。捨てられないモノは山ほどあるのに。その人にしか分からないモノの良さは、ある。

例えば、「噛まないフルーツガムを胸の内ポケットに忍ばせる」のは？これはネグレクトになるのかしら。

作中の「りゅうちゃん」と「サキコ」。二人はすり鉢状の小さな田舎町で、泳ぐように生きる。りゅうちゃんはずっと、フルーツガムを手放せないでいる。サキコの匂いがするから、と言って。

彼らに出会ってからというもの、私たちみんな泳いでいるのかもしれない、と考えてならない。それはそう、あなたも。

いつの間にか滲み出してくる記憶。忘れたつもりのものが、時々顔を見せるのは、匂いや音のせいなのか。それはときに面倒で、けれども決して揺るがない。捨てられないお守りのような記憶には、「自分同士の秘密」としてそっと鍵を掛けよう。

私のように、片付けが捗らない方。本棚にまだ余裕はありますか。どうかあなたに、この一冊を迎え入れて欲しいのです。

世界の図書館

[イタリア・オーストラリア編]



パドバ大学経済学部と地理学部の図書館

Biblioteche di Economia e Geografia - Emeroteca

Via del Santo, 22 - 35123 Padova
<http://bibliothecacaborin.cab.unipd.it/>

イタリア

経済学部 教授 山村 英司

私が2023年4月から1年間滞在したのは、イタリア北部のベネト州にあるパドバ大学である。ベネチアやベローナという観光名所の中間に位置している。1222年に出来ているので、つい最近創立800周年を迎えたところだった。世界で5番目に古い大学らしい。かの有名なガリレオ・ガリレイが教授を務めたことで知られ、大学そばには「ガリレオ・ガリレイ通り」もある。本部は観光スポットになるほど荘厳な建築で、建物内に世界初の解剖学教室が設置されたことで知られる。植物園はヨーロッパ最古とされ、ヨーロッパ各地から留学生が訪れ、文学者のゲーテがインスピレーションを受けたとされる「ゲーテ」の



[写真1 図書館内部]

本も現存する。日本では知名度は低いですが、パドバ大学はヨーロッパの名門大学の一つに数えられる。

本企画の過去記事のように由緒ある立派な図書館を紹介したい。しかし、それは不可能だ。残念なことに図書館は学部ごとに存在し、市内各所に分散している。一つ一つが小さく、外観などで特筆すべきものがない。要するに本部建築のような特徴がない。現在はオンライン図書館が主流である。ちなみに検索システムの名は「ガリレオ・ディスカバリー」。一般にイメージする「大学図書館」とはかなり状況が違う。

パドバには世界中から巡礼者が集まるサンタントーニオ教会

がある。教会に至る通りは「聖通り」。この通り沿いに、パドバ大学経済学部とその附設図書館がある。図書館内部は、建物自体は古いので天井が高く、シャンデリアがつるされている。この点は、ヨーロッパの大学風である。訪問した日は空席がほとんどないほど混んでいた[写真1]。

イタリア人は飲んで食べて、鼻歌交じりに日々楽しく陽気で過ごす印象がある。

紙に書かれたルールよりも、人間関係の濃淡で物事が決まるという話もよく聞く。じつは、これが当てはまるのはローマや南部イタリアである。ベネト州の気質は控えめで、真面目、几帳面だ。さまざまなことがルールに従ってシステマ

ティックに動く。日本の明治維新と同じ頃、イタリアは多種多様な小国が統一して誕生した。

東日本人(私は北海道出身)からすれば、福岡、長崎、佐賀、熊本、大分、宮崎、鹿児島はすべて「九州人」で同質的な存在だ。「それは違います」と皆さん反論したくなるでしょう？それと似たようなことがイタリア北部にも当てはまる。北部にはミラノがあるロンバルディア州、ボローニャのエミリア・ロマーニャ州などがあるが、気質や食文化が微妙に違う。ベネト州はもともとベネチア共和国。図書館で無駄話もせず、一心不乱に課題に取り組む学生の姿はまさに「ベネト」的だった。



〔写真1 キッズスペース〕



キャスリーン・サイム図書館・地域センター

Kathleen Syme Library and Community Centre 251 Faraday Street, Carlton VIC 3053 Australia
<https://www.melbourne.vic.gov.au/community/hubs-bookable-spaces/kathleen-syme-library-and-community-centre/Pages/kathleen-syme-library.aspx>

オーストラリア

法学部 教授 小寺 智史

キャスリーン・サイム図書館は、メルボルン中心部に近いカールトンと呼ばれる地域にある。カールトンは、メルボルン大学とメルボルン博物館に挟まれたような場所にあり、イタリア系移民のコミュニティがあるところで知られる。メルボルンの中心部は常に観光客で賑わうが、図書館の周りには人が少なく、ゆつくりとした空気が流れている。

メルボルンでの在外研究中、毎週木曜日、キャスリーン・サイム図書館に通うのが楽しみだった。なぜこの図書館に通うことになったのか。それは、図書館が開く「英会話クラブ」に参加するためである。メルボルンのいくつかの図書館は無料で英会話クラブを開催している。

参加するにはネットでの予約が必要だが、メルボルン市立図書館など中心部の図書館はすぐに予約が埋まる。そのため、比較的予約が取りやすいキャスリーン・サイム図書館に通うことになった。

英会話クラブといっても、英語を学ぶクラスではない。図書館司書の方がメルボルンに関する話題を提供し、参加者はそれについて自由に話す。英会話クラブには様々な人種や国籍の人々が参加する。夫の転勤に同行してきたイラン人、旅行で訪れたスペイン人、食肉工場を辞めたばかりのインドネシア人、娘に呼び寄せ

られた中国の老夫婦など。移民たちは木曜日の午前中に図書館に集い、いっとき会話を交わした後、各々の日常に戻っていく。

ジャーナリストで、女性の福祉向上に尽力したキャスリーン・アリス・サイム(1896-1977)の名を冠した図書館は、正式には「キャスリーン・サイム図書館・地域センター」といい、地域の人々

が集う場所としての機能も担っている。決して大きな図書館ではないものの、地域の人々に長年愛されてきた雰囲気、建物の全体から感じられる。

キャスリーン・サイム図書館には足繁く通ったものの、所属した大学の図書館にはほとんど行かなかった。というのも、図書館のデータベースには自宅



〔写真2 外観〕

からアクセスできたからである。しかも、キーワード検索すれば関連する論文や本が瞬時に示され、ほとんどの文献は電子ブックなどで読むことができる。実際、同僚たちに聞いても、研究のために図書館には行かないということであった。

図書館という物理的な存在は、文献を調べる場所としての機能を失いつつあって、これからは人々が集う空間として位置づけることが必要かもしれない。穏やかな木曜の午前、メルボルンのホースレースについて話しながら、そんなことをぼんやりと考えていた。

図書館 イチ押しの コーナー

図書情報課 篠崎 結衣

これまで、図書館から“学修支援”や“研究支援”について考えてきたこのコーナー。
今回は、“支援”という視点から少し離れ、学内でもなかなか知られていない
であろう、図書館内の様々なコーナーについて、ご紹介いたします。
各コーナーの場所は、フロアマップをご参照ください。



ベストセラーズコーナー

1F

芥川賞や直木賞等の様々な賞の受賞作品やノミネート作品、人気作家のシリーズ、ネットで話題になっている作品等を集めたコーナーです。最近のものはもちろん、長年ベストセラーになっているものもあります。もしかしたら、学生のみなさんが生まれた頃の本もあるかもしれません。

入退館ゲートから近いコーナーなので、時間のある時に立ち寄って、面白そうな本を見つけてみてください。



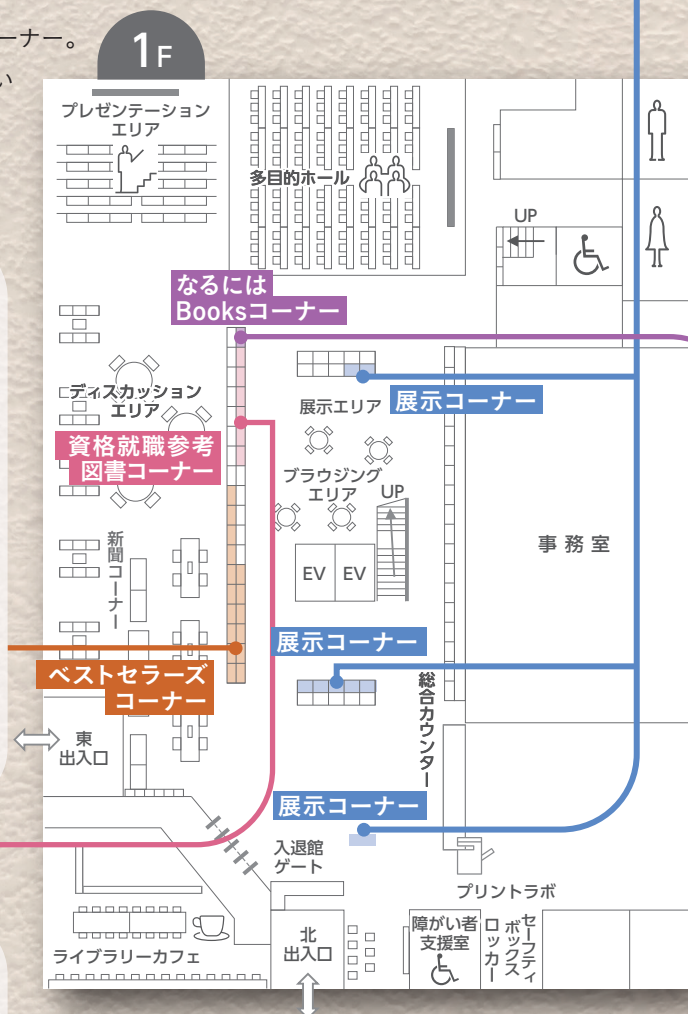
資格就職参考図書コーナー

1F

資格取得や就職関連の資料を配架しています。禁帯出資料ですので、貸出や図書館外への持ち出しはできませんが、館内での学修にご利用いただけます。



資格就職参考図書コーナーは、自己分析や業界・職種に関するものの他、就職試験(面接・小論文)などの参考図書を取り揃えています。また、各種公務員試験や資格試験(幼稚園教諭、保育士、社会福祉士など)に関するものも集めています。



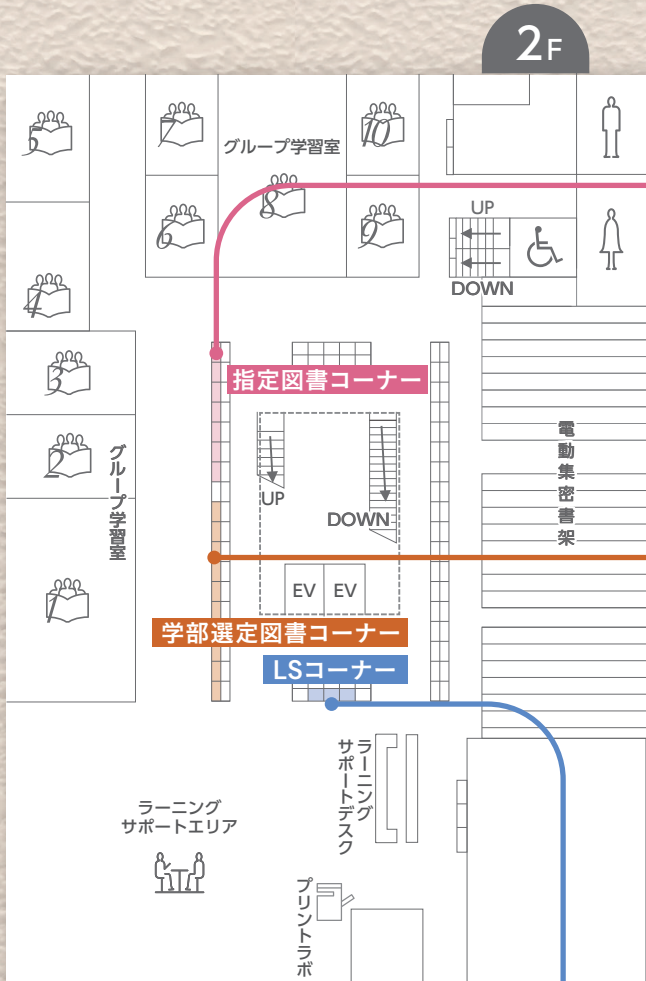
なるにはBooksコーナー

なるにはBooksコーナーは、様々な職業に「なるには？」という視点で書かれた本を集めているコーナーです。その職業の魅力や現実、実際に働いている人の声、その職業に就くまでの内容が詳しく書かれています。現在約150種類の職業についての本が刊行されており、そのほとんどを所蔵しています。就職活動の前だけではなく、少し悩んでいる時や就職なんてまだ先という時でも、きつとなにか役立つ情報が載っているはずです。憧れの職業の本を読んでみても面白いかもしれません。

展示コーナー

1F

図書館では、様々な展示を行っています。一番目にするのは、1階エレベーター前の展示コーナーです。展示コーナーでは、最近話題のテーマや季節をモチーフにしたものの他、みなさんが新しい何かを「見つける!」「始める!」きっかけになるようなテーマを集めています。その他、入退館ゲートの近くやエレベーター裏の吹き抜け部分で、国連に関する内容やその時々になんだ内容を展示しています。



1F

指定図書コーナー

2F

先生方が学生のみなさんに「授業で紹介したい」「参考に読んでほしい」と思う資料を集めているコーナーです。先生方の名前のアルファベット順に並べていますので、授業で紹介された際にはぜひ探しに来て下さいね。大学では教科書だけでなく様々な資料を使って勉強することになりますので、その際に参考にしてください。また、多くの方に手に取ってもらえるよう、指定図書コーナーの資料は禁帯出となっております貸出ができませんが、指定図書コーナーの他に、貸出可能なものを通常書架に配架していますので、借りたい時はOPACで検索してみてください。自分の学部だけど講義を受講していない先生や、他学部の先生の指定図書を見てみても面白いかもしれません。



学部選定図書コーナー

2F

各学部の先生方が学生のみなさんに読んでもらいたい基本図書や選定図書を集めているコーナーです。上記の指定図書コーナーとの違いは、先生ごとではなく学部として、テーマに応じて選定された図書という点です。現在、外国語学部、法学部、人間科学部、国際文化学部で選定されています。学部選定図書も指定図書と同じく、禁帯出となっておりますが、貸出可能なものは通常書架に配架しています。



LSコーナー

2F

LS(ラーニングサポート: Learning Support)コーナーは、入学前教育・初年次教育に関連する図書を集め、それぞれ配架しているコーナーで、最近新しくできたコーナーです。入学前教育に関しては、各学部の先生方が選定した入学前課題に関連する図書を、学部別に配架しています。また、初年次教育に関しては、西南学院大学の教育課程に準じ、基幹科目の中の「西南学院史」「ライフデザイン科目」「データサイエンス科目」「スタディスキル科目」「ヘルスリテラシー科目」に分けて配架しています。



『水に浸けられた浸礼派』

(Daniel Featley, *The Dippers dipt. or The Anabaptists Duck'd and Plung'd over Head and Eares, at a Disputation in Southwark, London, 1645.*)

[6階R:貴重書庫198/38/40]

2023年5月12日、百年館(松緑館)に西南学院バプテスト資料室(以下、資料室)が開室した。資料室では、本学神学部に関する資料、各教会資料、日本バプテスト連盟や宣教師関連資料の収集・公開を行っている。資料室開室を記念し、大西晴樹氏(東北学院院長・大学学長)により「西南学院バプテスト資料室に期待するもの」と題する講演(*)が行われ、大西氏より以下の3冊の貴重書が寄贈された。

- ① Daniel Featley, *The Dippers dipt. or The Anabaptists Duck'd and Plung'd over Head and Eares, at a Disputation in Southwark, London, 1645.* [表紙中央]
 ② William Orame (ed.), *Remarkable Passages in the Life of William Kiffin*, London, 1823. [表紙下部]
 ③ William T. Whitley, *A Baptist Bibliography: being a register of the chief materials for Baptist history, whether in manuscript or in print, preserved in Great Britain, Ireland, and the Colonies*, vol. 1, London, 1916. [表紙上部]



【図1】『水に浸けられた浸礼派』(1645) ①の扉絵

本稿では、17世紀イングランドにおいて発展したバプテスト教会に対する迫害の様子を伝える重要な記録であるこれらの貴重書について紹介したい。表紙に掲げたこれらの貴重書のなかでも一際目を引くのが、ダニエル・フィートリ(1582-1645)による『水に浸けられた浸礼派』(1645) ①の扉絵【図1】である。イングランド国教会の指導的な神学者であり、国王チャールズ1世の側近としてチャブレンを務めたフィートリの論敵が、幼児洗礼を否定し、浸礼による信仰者のバプテスマ

マを執行したパティキュラー・バプテストであった。1642年にサザークで浸礼が行われると、フィートリは間もなく本書を出版して批判を展開した。本書は出版直後に6版を重ねるほど広く読まれ、バプテストへの更なる批判や迫害を引き起こした。

扉絵は、当時のバプテストに向けられた誤解と誹謗中傷を表している。中央にはヨルダン川で浸礼を受ける裸の男女が描かれている。そして、その周囲には「分離主義者(Separatist)」や「狂信者(Enthusiast)」(本学所蔵本では一部欠落)といっ

たバプテストに対する誤解と誹謗中傷の言葉が、風刺的な絵とともに記されている。また、本学の所蔵本では欠落しているが、大英博物館の所蔵本では、下部に「この種のすべての特徴を見よ(See the Characters of all these Sorts)」と記されている。

フィートリと論争を繰り広げたのが、パティキュラー・バプテストの指導者のひとりウィリアム・キッフィン(1616-1701)である。バプテスト教会にはジェネラル派とパティキュラー派の二つの潮流がある。キリストの贖罪は信じる人々すべて(ジェネラル・ピープル)に普遍的に与えられると説いたオランダの神学者アルミニウス(1560-1609)の普遍的贖罪説に立つのがジェネラル・バプテスト派である。これに対し、キリストの贖罪は神に選ばれた特定の人々(パティキュラー・ピープル)に与えられると説いたカルヴァンの限定救済説に立つのがパティキュラー・バプテスト派である。

19世紀には、後者を指導したキッフィンが77歳を迎えた1693年に起こした手稿『回想録』が出版されている[②]。本書には、回心体験や自身がバプテスト派に関わるようになった経緯が詳しく記されている。キッフィンはパティキュラー・バプテスト派の最初の信仰告白である「第一ロンドン信仰告白」(1644年10月)の筆頭署名者となる。彼は召天の年である1701年まで、60年近く、海洋貿易という実業に従事しながら、パティキュラー・バプテスト派の牧師を続けた。本書[②]の価値は、キッフィンの生涯を知ることと同時に、初期イングランド・バプテストの様子を知ることができる点にある。とりわけ、迫害下、いかにしてバプテストが信教の自由の思想を形成したかを伝える重要な文献である。

『バプテスト・ビブリオグラフィー』[③]は、英国、アイルランド、そして英国の植民地に所蔵されているバプテストの歴史に関する文献、資料、人物を限なく網羅したものである。1916年出版の第1巻は1526年から1777年の人物を、1922年出版の第2巻は1777年から1873年の人物をそれぞれ紹介している。ホイットリーはバプテスト史研究に近代的方法論を取り入れ、20世紀のバプテスト研究の発展に貢献した。

※: 本講演の内容は『西南学院アーカイヴズ』第2号に収録しています。百年館(松緑館)で配布の冊子および西南学院史資料センターホームページで公開のデータでご覧いただけます。

【参考文献】

バプテスト史料書編纂委員会編『見えてくるバプテストの歴史』関東学院大学出版会、2011年。
 大西晴樹『海洋貿易とイギリス革命——新興貿易商人の宗教と自由』法政大学出版局、2019年。

●本稿で紹介した貴重書は、百年館(松緑館)1階で展示しています。展示についての情報は西南学院史資料センターのホームページをご確認ください。

編集後記

季節が巡るのは早いものですね。

4月初め、先輩の見よう見まねで入退館ゲートに学生証をかざしていた新入生が、1か月も経つとすっかり慣れた様子で図書館を利用している姿を見かけます。

皆さん、4年間は意外とあっという間ですよ。好きなことを見つけて、充実した学生生活が送れますように。図書館で過ごす時間が、少しでもあなたに寄り添えますように。

(T.S)

西南学院大学図書館報 No.196

2024年4月30日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511 福岡市早良区西新6丁目2番92号

Email lib-jm@seinan-gu.ac.jp

https://opac.seinan-gu.ac.jp/library/

図書館報バックナンバーも上記サイトに掲載しています。